

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第69集

く わ の き
桑ノ木遺跡

中間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第69集

く わ の き
桑 ノ 木 遺 跡

申間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター



桑ノ木遺跡近景（南から）

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃より深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、串間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴い、桑ノ木遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、中世の掘立柱建物跡が検出され、土師器片等が検出されました。今後の串間市の歴史解明の資料の一つになるものと考えます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例 言

- 1 本書は、串間警察署郡元職員宿舍新築工事に伴い、宮崎県教育委員会が行った桑ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年11月26日から平成14年2月13日まで行った。
- 4 現地での実測等の記録は、杉田康之、重留康宏が作成した。
- 5 本書に使用した写真は杉田が撮影し、空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 6 テフラ分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
- 7 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は杉田が整理作業員の補助を得て担当した。
- 8 本書で使用した「桑ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図」は、串間市役所が作成した25,000分の1図「宮崎県串間市全図」、「桑ノ木遺跡発掘調査範囲図」は串間市役所が作成した5,000分の1図「都市計画図」を基に作成した。
- 9 土層断面及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。
- 10 本書で使用した方位は、座標北（座標第Ⅱ系）及び磁北である。座標北を用いた場合には、G.N.、磁北はM.N.と表示している。レベルは海拔絶対高である。
- 11 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB・・・掘立柱建物跡 SC・・・土坑 SH・・・ピット
- 12 本書の執筆及び編集は、杉田が担当した。
- 13 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第II章 調査の記録	4
第1節 調査の経過	4
第2節 層序	5
第3節 遺構	8
第4節 遺物	10
第III章 まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 桑ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図	3
第2図 桑ノ木遺跡発掘調査範囲図	4
第3図 土層断面図	6
第4図 火山ガラス比ダイアグラム	6
第5図 遺構分布図	7
第6図 掘立柱建物跡(SB1)実測図	8
第7図 土坑(SC1)実測図	9
第8図 出土遺物実測図(1)	11
第9図 出土遺物実測図(2)	12

表 目 次

第1表 土層注記表	6
第2表 火山ガラス比分析結果	6
第3表 テフラ検出分析結果	6
第4表 屈折率測定結果	6
第5表 出土遺物観察表	13

図 版 目 次

図版1 桑ノ木遺跡近景、調査区全景	15
図版2 土層断面、遺物出土状況、掘立柱建物跡、土坑	16
図版3 出土遺物	17

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

申間市大字西方字桑ノ木4043-1に、警察共済組合宮崎支部による鉄筋コンクリート造3階建ての申間警察署郡元職員宿舎の新築工事が計画されたため、県教育庁文化課では平成12年度に、開発事業と埋蔵文化財の取扱いについて協議が必要な箇所であることを宮崎県警察本部会計課に伝えた。そして、平成13年4月に協議を行った結果、試掘調査を実施することになった。試掘調査は平成13年5月10日から11日にかけて実施した。調査の結果、中世の土師器等の遺物、掘立柱建物跡と想定される柱穴が確認できたため、埋蔵文化財の取扱いについて会計課と協議を行い、工事の影響が及ぶ800㎡について発掘調査を実施することになった。

調査は、平成13年11月26日から平成14年2月13日までの間実施した。また、平成14年度には、遺物整理と報告書作成を埋蔵文化財センターで行った。

第 2 節 調査の組織

桑ノ木遺跡の調査組織は次のとおりである。

	発掘調査（平成13年度）	整理報告（平成14年度）
宮崎県埋蔵文化財センター		
所 長	矢 野 剛	米 良 弘 康
副 所 長 兼 総 務 課 長	菊 地 茂 仁	大 藪 和 博
副 所 長 兼 調 査 第 二 課 長	岩 永 哲 夫	岩 永 哲 夫
総 務 係 長	亀 井 雑 子	野 邊 文 博
調 査 第 二 課 調 査 第 三 係 長	菅 付 和 樹	菅 付 和 樹
同 係 主 査（調 査 担 当）	杉 田 康 之	杉 田 康 之
調 査 員（調 査 担 当）	重 留 康 宏	

第3節 遺跡の位置と環境

桑ノ木遺跡は、宮崎県串間市大字西方字桑ノ木に所在する。

串間市は、宮崎県の最南端部に位置している。北部はうっそうたる山林に包まれ、東南一帯は太平洋に面している。市内は、南那珂山地と呼ばれる地質である。この山地は、北部にある鰐塚山(1,119m)から南部の都井岬に漸次低下してきており、全体的に南に傾く線相を呈している。その山地に源を発する福島川は、市内最大の福島平野を北から南に貫流し太平洋にそそいでいる。海岸部にはたくさんの出崎がある。良港も多く、中世以来外国貿易の拠点であった崎田港(現在本城漁港)などがある。遺跡の所在する一帯は、市内を走る二つの山脈の間に展開する福島平野の福島川右岸標高約16mの河岸段丘上に立地している。建久8年(1197年)の「日向国図田帳写」によると、すでに鎌倉時代初期には、島津荘の一部である櫛間院として耕地開発されていたところである。

周辺の遺跡について時代別に述べる。縄文時代の遺跡としては、本遺跡より約9km北上した台地上に、竪穴住居跡50軒が検出された三幸ヶ野遺跡がある。大量の縄文時代後期の土器や数多くの磨石・石皿とともに住居跡の多くから炭化した木の葉が見つかることなどから、木の葉類の採集・加工を主な生業とした生活が想定されている。また、南方約3kmには、福島川の河口南岸の隆起砂丘上に、下弓田式土器の標識遺跡として有名な下弓田遺跡がある。土器とともに石錘が大量に出土し、浮子と思われる軽石製品も見られることから漁労に生業の重点を置いた営みが推察されている。

弥生時代の遺跡としては、本遺跡より西約1.6kmの善田原台地上に8軒の竪穴住居跡とともに弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器が出土した唐人町遺跡がある。また、大字北方、標高約27mの小高い丘に所在している大田井遺跡は、壺、高坏、鉢が小範囲内から一括出土しており、出土状況や出土土器の組合わせなどから祭祀遺跡の可能性も指摘されている。

古墳時代としては、本遺跡付近に点在している福島古墳群がある。昭和8年に地下式横穴1基・円墳15基・前方後円墳3基の計19基が県指定史跡となっているが、現在形状を把握できるのは福島小学校周辺の5基のみとなっている。そのうち、調査区の近辺では、西南に墳長約60mの前方後円墳の剣城塚(福島4号墳)や、西には県内の円墳の中でも6番目の規模をもつ円墳の霧島塚(福島9号墳)が隣接している。

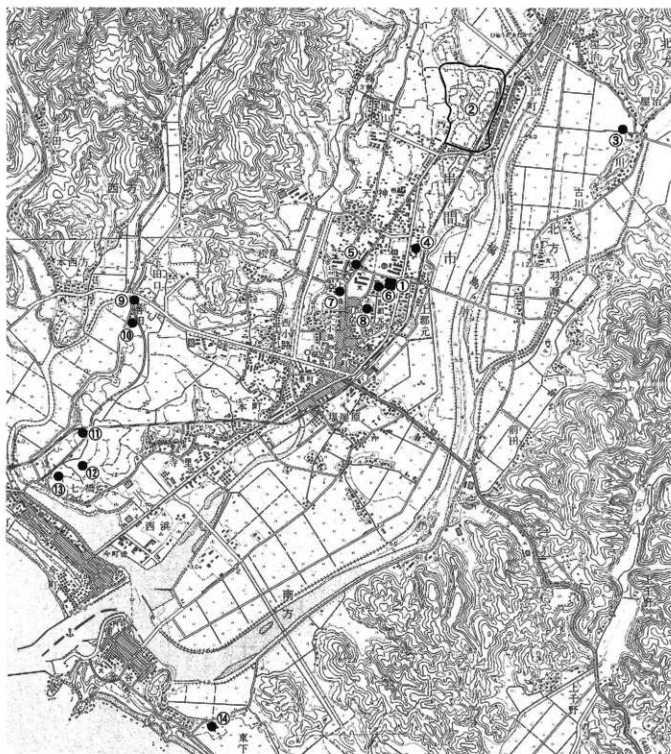
中世の遺跡では、1kmほど北上すると中世城郭である櫛間城跡がある。1335年、野辺盛忠によって築かれた城は、13から14の独立した曲輪で構成される典型的な南九州タイプの広大な中世城で、江戸時代の初期まで櫛間地方の政治・軍事の中心であった。遺物としては、大量の土師器・陶磁器・銭貨・鍛冶関連品・石製品などが出土した。

このように、本遺跡の所在する福島平野一帯は、山塊を背景に、樹枝状に河川が流出する温暖な気候のもと、照葉樹林が繁茂するという恵まれた自然環境を背景とした生活が営まれ、中世からは、地域文化の中心的な役割を果たしてきた歴史的な環境をもつ地域であったと考えられる。

【参考文献】

串間市 1996『串間市史』

串間市教育委員会 1992『三幸ヶ野遺跡』串間市文化財調査報告書 第7集



500m 0 500 1000 1500m

- | | | | |
|------------------|-----------------|----------|-----------------|
| ①桑ノ木遺跡 | ②櫛岡城跡 | ③大田井遺跡 | ④福島5号墳 (毘沙門塚古墳) |
| ⑤福島9号墳 (霧島塚古墳) | ⑥福島4号墳 (剣城塚古墳) | | |
| ⑦福島10号墳 (万多城塚古墳) | ⑧福島3号墳 (長清見塚古墳) | ⑨銭亀塚古墳 | |
| ⑩唐人町遺跡 | ⑪崩先第1号古墳 | ⑫崩先第2号古墳 | ⑬崩先地下式墓 |
| | | | ⑭下弓田遺跡 |

第1図 桑ノ木遺跡と周辺の遺跡位置図 (S=1/25,000)

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査の経過

遺跡は、標高約16mの河岸段丘上に位置する。

調査は警察職員宿舍が建設される部分の約800m²を対象にして行った。まず、重機により客土の除去を行った。本調査区の用地買収前は旧営林署跡地であり、ほぼ全域にわたって鬼界アカホヤ火山灰層下の黒褐色土層にまで至る擾乱坑が調査区面積の20%程存在していた。

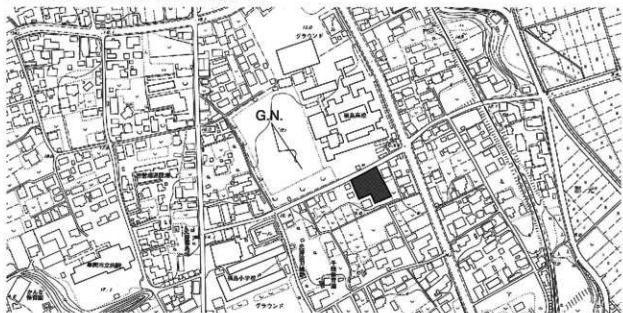
客土の除去後トレンチを数カ所設定して土層の確認を行った。その結果、緩やかに傾斜した地形であること、テフラの堆積状況が一樣でないことなどとともに、第Ⅱ層で遺物が出土することが確認された。

そこで調査は、まず第Ⅱ層（黒褐色土）上面で調査区全体を揃える作業から始めた。

第Ⅱ層を人力で剥ぎながら、遺構・遺物の精査を行った。その結果、遺構は検出できなかつたが、遺物が中世の土師器片を中心に出土した。これらは、浅い谷地形を形成している南西部に集中していることから、流れ込みではないかと考えられる。続いて、試掘で包含層と考えられていた第Ⅲ層暗褐色土の精査を行った。その結果、上層から土師器15点と弥生土器1点が出土するにとどまった。さらに精査を進めていくと、黒色土下層で調査区全域からピット群が検出され、北西部に掘立柱建物跡1棟が検出された。この埋土には、暗褐色土にボラと鬼界アカホヤ火山灰が少量混入していた。さらに精査を進めていくと、東部に鬼界アカホヤ火山灰層上面から掘り込まれた土坑を検出した。

縄文時代早期から後期旧石器時代の遺構・遺物については、調査区面積の約25%にあたるトレンチを設定して調査した。安全に留意しながら始良・入戸火砕流を含む層まで人力で掘り下げて精査したが、遺物や遺構は検出できず調査を終了した。

現地では記録作成のため、国土座標（XY座標）に乗じ、A-1グリッド（-170144.165,22332.547）を設定した後、10mグリッドを設置していった。また、本調査区は排土置き場が狭いため、調査区を二つに分け、反転しながら調査を実施した。



第2図 桑ノ木遺跡発掘調査範囲図（S=1/5,000）

第2節 層序

土層断面図(セクション1)を第3図に示した。

客土は、大量の建築廃材等を含んだ黒褐色土で、特に表面付近はクラッシュランが敷き詰められていた。この客土を除去した後にトレンチを数カ所設定し、土層の確認を行った。その結果、北東部から南西部に向かって緩やかに傾斜した地形であることや、テフラの堆積状況は一様ではないことが確認された。

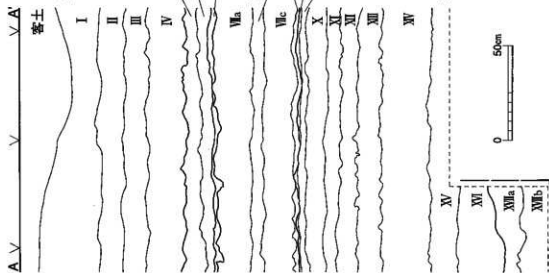
第I層は耕作土で、現代の建築廃材等を含んでいた。第II層は、かたくしめる黒褐色土である。上層から中世の土師皿の小片が出土したが、層序や出土状況から流れ込みではないかと考えられる。中・下層では遺物は出土しなかった。また、この層には、暗灰色や暗褐色のスコリア(最大径1.8mm)が含まれており、その特徴や火山ガラスの特徴から10~13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア(Kr-ThS)の可能性が考えられる。第III層は、植物の腐敗土などの少し赤みがかる暗褐色土である。土質はそれほどしまらない。第IV層は、しまらずさらさら削れる黒色土である。遺物は、土師器片を中心に17点出土した。この層の中程から、多数のビット等や掘立柱建物跡が検出された。第V層は、軽石を含む層である。この軽石は、重鉱物の組み合わせや、火山ガラス、斜方輝石、角閃石の屈折率などから、約5,500~5,700年前※¹に池田湖火山から噴出した池田湖テフラ(Ik)と考えられる。第VI層の成層したテフラ層は、層相から約6,300年前※¹に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)に同定される。第VIIa層は、黄褐色細粒火山灰層。第VIIb層は、橙色細粒火山灰を含む明黄褐色粗粒火山灰層。第VIIc層は、白色軽石混じり灰白色粗粒火山灰層。そして第VIId層は、黄色軽石混じり火山豆石層(豆石の最大径6mm、軽石の最大径4mm)である。この層は、重鉱物の組み合わせや斜方輝石の屈折率などからK-Ahの噴火に先立つ幸屋火砕流堆積物(K-Ky)に同定される。北西部では鬼界アカホヤ火山灰層が発達しており、その中間層である第VIIc層も厚いが、北東に向かうにつれて鬼界アカホヤ火山灰層はやせていき、第VIIc層も消失していく。第XI層には、約2.4から2.5万年前※¹の始良入戸火砕流堆積物(A-Ito)に由来するテフラ粒子が多く含まれている。しかしながら、斜方輝石の屈折率をみると、桜島火山起源のP13からP11にかけてのテフラが含まれていると考えられる。その中では、約8,000年前※¹のP12に由来する可能性が高いと考えられる。第XII層に含まれる屈折率が高い火山ガラスや多くの斜方輝石は、約1.1万年前に桜島火山付近から噴出した桜島薩摩テフラ(Sz-S)に由来すると考えられる。XIII層は、始良・入戸火砕流である。砂質で径が1~3mmのスコリアを含む。

調査では、このXIII層までトレンチを入れて精査したが、遺物・遺構等は検出できなかった。

※¹: 放射性炭素(¹⁴C)年代

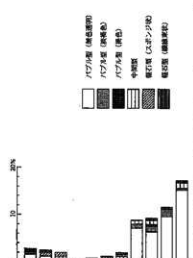
【参考文献】

- 新井勝夫(1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、p.254-269。
新井勝夫(1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」、p.138-148。
寛牧重雄(1969) 鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物。地質雑、75、p.425-442。
池田晃子・奥野 克・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995) 南九州、始良カルデラ起源の大規模下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究、34、p.377-379。



第3図 土層断面図(セクション1) (S=1/20)

層号	土層名	色	層厚	備考	調査時期
I	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	①②
II	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	③
III	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	④
IV	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑤
Va	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑥
Vb	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑦
VI	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑧
VII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑨
VIII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑩
IX	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑪
X	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑫
XI	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑬
XII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑭
XIII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑮
XIV	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑯
XV	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑰
XVI	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑱
XVII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑲
XVIII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	⑳
XIX	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉑
XX	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉒
XXI	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉓
XXII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉔
XXIII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉕
XXIV	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉖
XXV	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉗
XXVI	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉘
XXVII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉙
XXVIII	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉚
XXIX	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉛
XXX	腐植土	黒	100	腐植土 腐植層が厚い	㉜



第4図 火山ガラス比ダイヤグラム(セクション1)

第2表 火山ガラス比分析結果(セクション1)

試料	wa(%)	ba(%)	wa(%)	mb	pa(%)	mb(%)	その他	合計
①	4	1	2	0	0	0	0	233
②	3	0	0	2	1	2	0	244
③	2	0	0	1	2	0	0	245
④	0	0	0	1	0	0	0	249
⑤	0	0	0	1	1	0	0	248
⑥	1	0	0	2	1	1	0	247
⑦	1	0	0	2	1	1	0	245
⑧	18	2	1	2	0	0	1	229
⑨	16	3	1	2	0	1	1	227
⑩	24	4	0	3	0	1	1	221
⑪	24	1	0	3	0	1	1	207

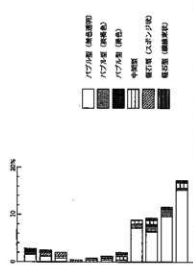
第3表 テフラ抽出分析結果(セクション2)

試料	赤石	スロリア	火山ガラス
①	+	量	色調
②	+	量	色調
③	+	量	色調
④	-	量	色調
⑤	-	量	色調
⑥	+	量	色調

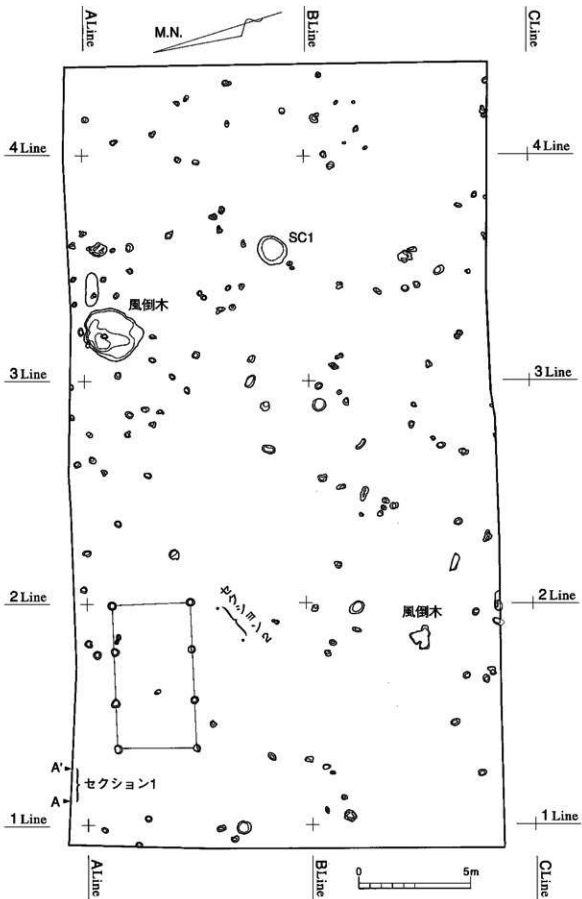
第4表 屈折率測定結果(セクション1)

試料	火山ガラス (n)	凝結物	角閃石 (n)	角閃石 (d)
①	1.699-1.592	opt. br	1.711-1.715	1.679-1.674
②	1.599-1.515	opt. opt	1.708-1.713	-
③	1.699-1.591	opt. opt	1.708-1.722	-
④	1.699-1.591	opt. opt	1.708-1.711	-
⑤	1.699-1.591	opt. opt	1.709-1.722	-
⑥	1.699-1.591, 1.599-1.511	opt. opt	1.709-1.722	-

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 平均値, +: 少ない, -: 認められない
 なし: 最大値の測定は, mb: パブル量, pm: 黒石量



第5図 火山ガラス比ダイヤグラム(セクション1)



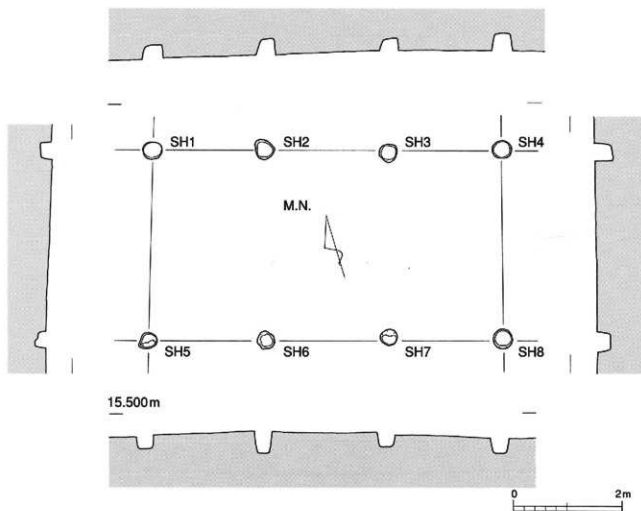
第5図 遺構分布図 (S=1/170)

第3節 遺構

検出された遺構を、「掘立柱建物跡」「土坑」の順で記述する。なお、掲載した遺物については、第5表「出土遺物観察表」を作成した。遺物の出土地点や特徴等の詳細については参照されたい。

＜掘立柱建物跡 (SB1)＞

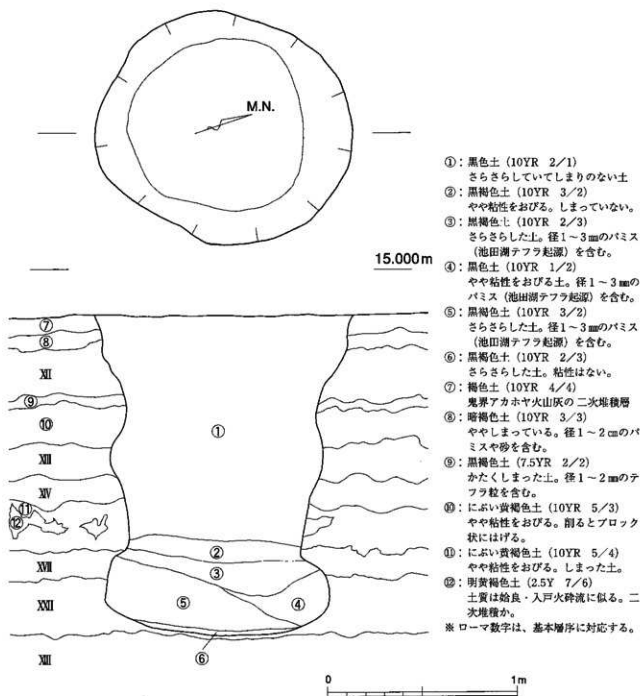
第IV層黒色土下層で梁行3間×桁行1間の掘立柱建物跡1棟が検出された。この建物跡の規模は、実長6.8m×3.8m、床面積約26㎡を測り、棟方位は、N72°Wの東西棟である。最大の柱穴はSH8で長径38cm、短径34cm。最小のものはSH5で長径30cm、短径28cmである。また、最深のものはSH6で46cm、最浅のものはSH7で21.8cmであった。いずれも円形に掘り込まれており、柱根、柱痕は確認できなかった。埋土は、中に径が1～10mmの塊状アカホヤを1～5%程度、径1～2mmの小粒状ボラを1%以下の割合で含む暗褐色土である。遺物等は出土せず、根石についても確認できなかった。火所に伴う炭や焼土は出土せず、溝状遺構や付属土壁等、付属する施設などは確認できなかった。遺構の上面から風化が進んでいるものの中世の土師皿が出土したこと、また、埋土は中世の土師皿が出土した第III層土であることから中世につくられたものと考えられる。



第6図 掘立柱建物跡 (SB1) 実測図 (S=1/70)

<土坑 (SC1) >

調査区の西部の第IV層上面で1基の土坑が検出された。平面プランは検出面で楕円形をとりながら下部に向かって径を細めていき、最深部では円形となる。規模は長径142cm、短径116cm。検出面からの深さ168cmを測る。検出面から20cmと80cm部分に20~30cm幅の窪みがまわっていることが確認された。さらに、底部は袋状に広がっており、ほぼ平らである。土坑に付随する遺構や遺物等は出土せず、時期を特定するには至らなかった。



第7図 土坑 (SC1) 実測図 (S=1/20)

第4節 遺物

基本層序の第Ⅱ層及び第Ⅲ層より約1,000点程の土器・陶磁器が出土した。土器・陶磁器いずれとも小片が多く、特に土器は風化しているものが多かった。

1 縄文土器 (第8図1)

1は口縁部が内湾し、口縁部の外側やや下方に刻目突帯を有する深鉢である。刻目の間隔は18mmを測る。口唇部は肥厚してやや丸みをおび、面取りされている。器面調整は外面に丁寧なナデ、内面にナデを施している。また、口唇部分にススが付着している。

2 弥生土器 (第8図2)

2は口縁部が内傾し、口縁部の外側下方に刻目突帯を2条有する深鉢である。突帯の間隔は17mmを測る。内外面とも黒変しているが、内面では口唇部付近、外面では突帯間に黒変はみられなかった。土器製作後の変化と思われる。

3 須恵器 (第8図3～4)

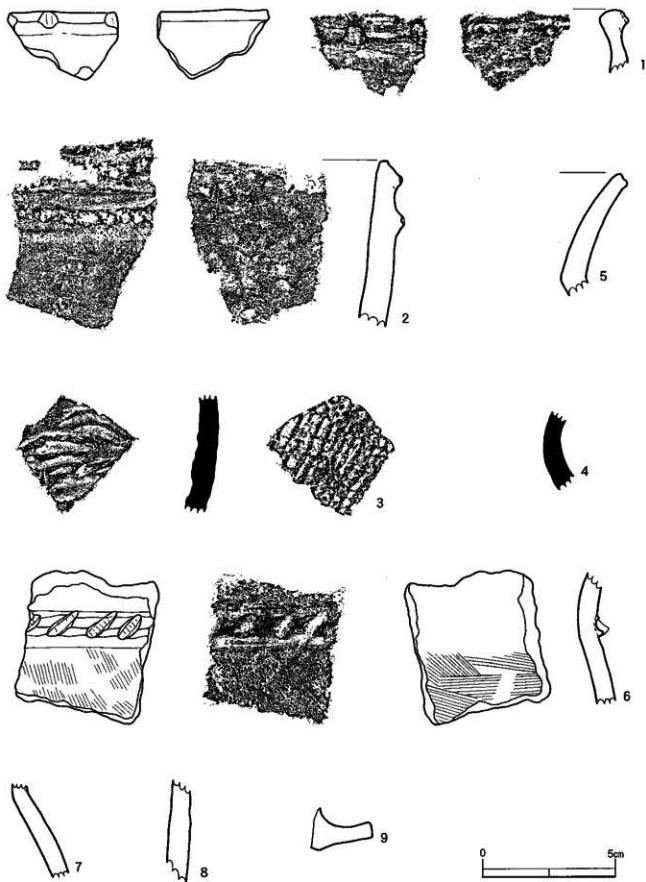
3は甕の胴部である。内面は同心円当て具痕、外面が格子目タタキである。4は甕の頸部である。内外面ともに丁寧なナデで、外面には自然釉が見られる。

4 土師器 (第8図5～9・第9図10～20)

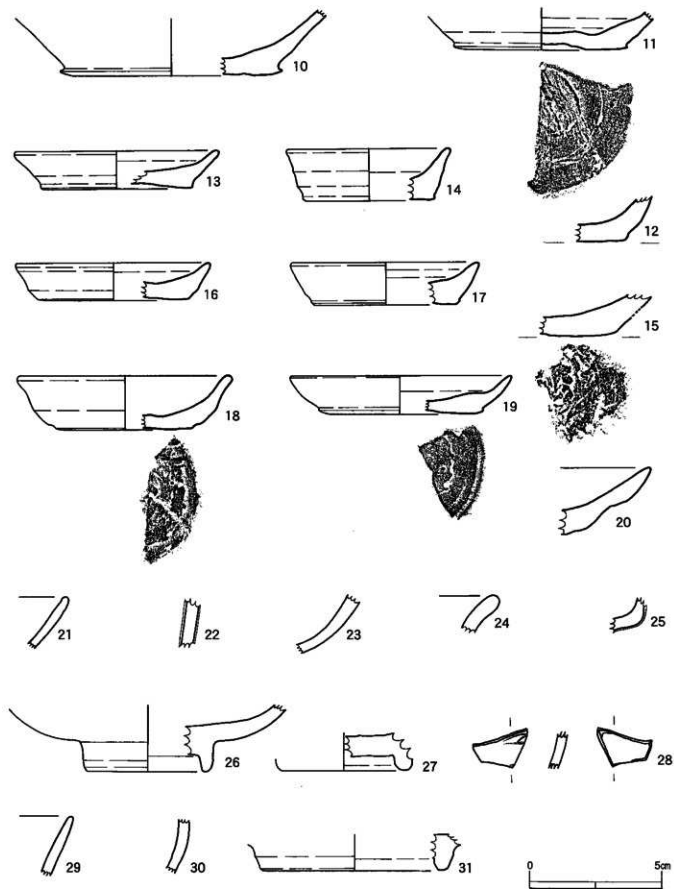
5は口縁部が緩やかに外反する甕で、口唇部は面取りされている。頸部で屈曲しており、内外面ともに明瞭な稜線が残存する。器面調整は内外面とも丁寧なナデである。内外面とも黒変がみられるが内面にその傾向が強い。6は頸部に貼付刻目突帯をもつ甕である。頸部を中心に「く」字形に緩やかに外反する。口縁部は断面形が舌状に尖る形状を呈する。内面全体に炭化物が付着している。7は甕の頸部、8は甕の胴部である。いずれも弥生土器と考えられるが、小片で断定できない。9は土師質土器の羽釜鏝で、外面全体にススが付着しているが鏝下部にその傾向が強い。10～12は坏、13～20は皿で、本遺跡で最も多く出土した遺物の一部である。底部の切り難しはいずれもヘラ切りである。10～11は底部からの立ち上がり直線的で、12はやや内湾する。13～15は底部からの立ち上がり直線的で、13～14は口縁端部が丸い。16～19は底部からの立ち上がりやや内湾し、18は先端でわずかに外反する。

5 陶磁器 (第9図21～31)

21～27は龍泉窯系青磁である。24は皿の口縁部で、貫入が見られる。25は内面に釉がかかっておらず、その形状から袋物ではないかと考える。それ以外は碗である。26～27は高台内面が無釉である。26は畳付が無釉で、27は畳付を越えて高台内面途中まで釉がかかり、見込みは蛇の目釉剥ぎである。28は芭蕉葉文と波濤文帯をもつ景德鎮の皿か。29～30は薩摩系陶器か。29は碗で、口縁は直線的にのびる。30は内外面の施釉の状況と形状から土瓶と考える。31は全面に施釉後、畳付の釉を剥いでいる。



第8圖 出土遺物実測圖(1)



第9图 出土遺物实测图 (2)

第5表 出土遺物観察表

遺物番号	種別	器位	出土地点	流量 (cm)		手法・調整・文様ほか		色		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面		
1	甕	頸口縁部	Ⅱ層				斜目突帯、横方向のナデ、スス付着	灰黄 (2.5YR 7/3)	灰黄 (2.5YR 7/3)	1mm以下の無色透明光沢粒を含む。	
2	釜	深鉢口縁部	Ⅲ層				斜目突帯、横方向のナデ、黒染	赤褐色 (5YR 4/3)	赤褐色 (5YR 4/6) 暗灰黄 (2.5YR 6/1)	2mm~5.5mmの黄褐色屑片を少量、2mm以下の白色の粒、1mm以下の無色光沢のある粒及び褐色の粒を含む。	
3	須恵器	胴部	Ⅱ層				格子目タタキ	灰白 (10Y 7/1)	灰白 (5Y 5/1)	精良	
4	須恵器	胴部	Ⅱ層				横方向のナデ、自然釉	暗灰 (N 3/)	灰:上部 (N 5/) 灰:下部 (N 4/)	精良	
5	土師器	頸口縁部	Ⅱ層				頸部に向かって横方向のハケ目の後、横方向のナデ	灰黄 (10YR 7/4)	灰黄 (10YR 7/4) 灰黄 (2.5YR 6/1)	微細~2mm程度の無色透明、褐色、黒の光沢のある粒と1mm~2.5mmの灰色、褐色、鈍い赤褐色、黒色粒を含む。	
6	土師器	胴部	Ⅱ層				斜付斜目突帯、横方向のナデ、斜方向のハケ目	灰黄 (10YR 8/4)	灰黄 (10YR 8/4)	2.5mm以下の灰色、茶色、無色透明光沢粒、黒色柱状光沢粒を含む。	
7	土師器	胴部	Ⅲ層				横方向のナデ	明赤褐 (5Y 5/6)	灰黄 (7.5YR 5/2)	3mm以下で赤褐色、褐色、灰褐色の粒、1.5mm以下で白色光沢のある粒を含む。	
8	土師器	胴部	Ⅱ層				斜方向のハケ目	灰黄 (10YR 6/4)	灰黄 (10YR 6/4)	2mm以下の無色透明光沢粒、灰色、茶色の粒を含む。	
9	土師器	胴部	Ⅱ層				横方向のナデ、スス付着	灰黄 (10YR 7/4)	灰黄 (10YR 7/4)	2mm以下の白色の粒、4mm以下の灰色の粒を含む。	
10	土師器	胴部	Ⅱ層	(8.8)			回転ナデ	灰黄 (7.5YR 8/4)	灰黄 (10YR 7/4)	微細~2mmの褐色の粒を多く含む。	ヘラ切り
11	土師器	胴部	Ⅱ層	(6.8)			回転ナデ	灰黄 (7.5YR 7/4)	灰黄 (7.5YR 7/4)	微細~1mmの褐色、赤褐色の粒を含む。	ヘラ切り
12	土師器	胴部	Ⅱ層				回転ナデ、黒染	灰黄 (7.5YR 8/4)	灰黄 (7.5YR 8/4)	1mm以下の茶色の粒、微細な無色透明光沢粒、黒色光沢粒を含む。	ヘラ切り
13	土師器	胴部	Ⅱ層	(8.1)	(6.0)	1.5	回転ナデ	灰黄 (7.5YR 6/4)	灰黄 (7.5YR 7/4)	微細~0.5mmの粒、灰黄と無色透明光沢のある粒を含む。2mmの灰褐色の粒を少し含む。	ヘラ切り
14	土師器	胴部	Ⅱ層			2.1	回転ナデ	灰黄 (7.5YR 7/4)	灰黄 (7.5YR 7/4)	微細な黒色や灰白色の粒、無色透明光沢のある粒と微細~1.5mmの赤褐色の粒を含む。	ヘラ切り
15	土師器	胴部	Ⅱ層				回転ナデ	黄 (7.5YR 7/6)	黄 (7.5YR 7/6)	1mm以下の茶色の粒を含む。	ヘラ切り
16	土師器	胴部	Ⅱ層	(7.7)	(6.0)	1.5	回転ナデ	灰黄 (7.5YR 7/3)	灰黄 (7.5YR 7/4)	微細~1mmの褐色と褐色の粒を含む。	ヘラ切り
17	土師器	胴部	Ⅱ層			1.7	回転ナデ	灰黄 (10YR 8/3)	灰黄 (10YR 8/4)	微細な黒、褐色の粒を含む。	ヘラ切り
18	土師器	胴部	Ⅱ層	(8.2)	(5.5)	2.2	回転ナデ	灰黄 (7.5YR 7/4)	灰黄 (7.5YR 7/4)	2mm以下の茶色、黒色の粒、微細な無色透明光沢粒を含む。	ヘラ切り
19	土師器	胴部	Ⅱ層	(8.7)	(5.9)	1.5	回転ナデ	灰黄 (7.5YR 8/4)	灰黄 (10YR 8/4)	1mm以下の茶色の粒、微細な無色透明光沢粒を含む。	ヘラ切り
20	土師器	胴部	Ⅱ層				回転ナデ	灰黄 (10YR 8/4)	灰黄 (10YR 8/4)	1mm以下の茶色の粒、微細な無色透明光沢粒を含む。	ヘラ切り
21	青磁	胴口縁部	Ⅲ層				施釉、貫入	青濁 (2.5Y 5/3)	青濁 (2.5Y 5/3)	精良、胎土調は灰黄 (2.5Y 6/2)	
22	青磁	胴部	Ⅲ層				施釉	オリーブ灰 (10YR 5/2)	オリーブ灰 (10YR 5/2)	精良、胎土調は灰 (10Y 8/1)	
23	青磁	胴部	Ⅲ層				施釉、貫入	オリーブ濁 (2.5YG 6/1)	オリーブ濁 (5Y 7/1)	精良、胎土調は灰白 (5Y 7/1)	
24	青磁	胴口縁部	Ⅲ層				施釉、貫入	オリーブ灰 (10Y 6/2)	オリーブ灰 (10Y 6/2)	精良、胎土調は灰白 (10Y 8/1)	
25	青磁	胴部	Ⅲ層				横方向のナデ	灰 (10Y 6/2) 灰黄 (5Y 7/3)	灰 (5Y 6/1)	精良、胎土調は灰 (5Y 6/1)	
26	青磁	胴部	Ⅲ層	(4.8)			横方向のナデ、施釉、貫入、高台内裏筋	明緑灰 (7.5Y 7/1)	明緑灰 (7.5Y 7/1)	精良、胎土調は灰白 (10Y 7/1)	
27	青磁	胴部	Ⅲ層	(4.9)			施釉、砂付帯、高台内裏筋	明緑灰 (7.5Y 7/1)	明緑灰 (7.5Y 7/1)	精良、胎土調は灰白 (10Y 7/1)	
28	柴付	胴部	Ⅲ層				施釉	明緑灰 (7.5Y 7/1)	明緑灰 (7.5Y 7/1)	精良、胎土調は灰 (7.5Y 8/1)	
29	陶器	胴口縁部	Ⅱ層				回転ナデ、施釉	黄褐 (10YR 5/6) 暗褐 (7.5YR 3/4)	黄褐 (10YR 5/6) 暗褐 (7.5YR 3/4)	精良、胎土調は灰黄 (7.5Y 6/4)	
30	陶器	胴部	Ⅱ層				回転ナデ、施釉、貫入	オリーブ濁 (2.5Y 4/3)	濁 (7.5YR 4/3)	精良、胎土調は灰黄 (7.5YR 6/3)	
31	陶器	胴部	Ⅱ層	(7.1)	1.4		施釉、裏付輪刺ぎ	灰黄 (2.5Y 8/3)	灰黄 (2.5Y 8/3)	精良、胎土調は灰黄 (7.5YR 7/3)	

第三章 まとめ

桑ノ木遺跡の所在する福島平野では、縄文時代から中世にかけての遺跡がたくさん確認されている。また、本調査区と国道を隔てた同地区内で、1998年に串間市教育委員会による試掘が行われ、弥生時代から平安時代にかけての土器が出土している。本遺跡の発掘調査では、主に中世の遺物が出土した。ここでは、検出した遺構・遺物についてまとめた。

<遺 構>

本遺跡では、掘立柱建物跡1棟と土坑1基が検出された。掘立柱建物跡は、風化が進んでいるものの中世のものとして判断できる土師皿が遺構上面から出土したこと、また、柱穴の埋土は中世の土師器が出土したⅢ層暗褐色土であることから、中世に構築されたものと考えられる。土坑は、掘り込みの様子から人的に掘り込まれたものである。遺物等が出土せず時期を特定するには至らなかったが、規模の大きさや3重に窪みがまわる形状は独特である。今後の類例を待ちたい。

<出土遺物>

縄文土器と弥生土器が少数出土した。いずれも小片で土器型式は特定できないが、弥生土器は宮崎市右葛ヶ迫遺跡で類似したものが出土している。

本遺跡では、中世の土師器片が最も多く出土した。また、13～15世紀と考えられる龍泉窯系の青磁が5点、15～16世紀と考えられる景德鎮窯の染付が1点、薩摩系陶器が2点出土した。遺跡の北には中世城郭である櫛間城があり、城郭内からは本遺跡で出土した陶磁器と同系列のものが多数出土している。土師器についても同様である。これらの遺物は遺構に伴うものではなく、双方の遺物の関連について詳細な検討をすることなしに短絡的に結びつけることはできないが、城郭と港を結ぶ中間地点という立地条件は、本遺跡との関連をうかがわせる。

【参考文献】

- 串間市教育委員会 1998 「市内遺跡発掘調査報告書」串間市文化財調査報告書 第17集
- 日本貿易陶磁研究会 1998 「貿易陶磁研究」No.1～No.5
- 中世土器研究会 1997 『概説 中世の土器・陶磁器』
- 宮崎県教育委員会 2000 「右葛ヶ迫遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集
- 2002 「本城跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第60集
- 宮崎県考古学会 1994 「宮崎考古 第13号」宮崎県南部における中世城郭の一例



桑ノ木遺跡近景（東から）



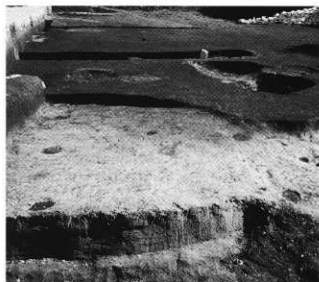
桑ノ木遺跡調査区全景：モザイク合成（垂直）



土層断面



遺物出土状況（第Ⅱ層）



掘立柱建物跡（検出状況）



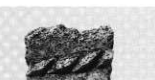
掘立柱建物跡（完掘状況）



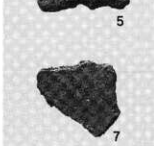
土坑（完掘状況）



土坑（断面：東から）



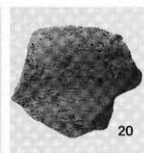
縄文時代晩期土器



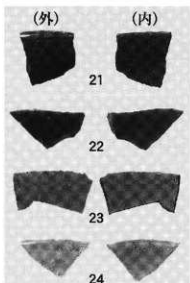
弥生土器

須恵器

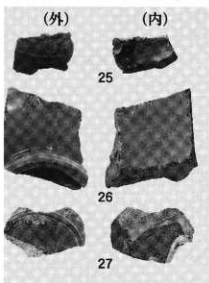
土師器



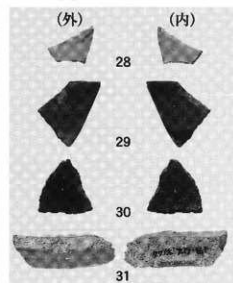
土師器 (9:羽釜、10~12:坏、13~20:碗)



龍泉窯糸青磁



龍泉窯糸青磁



その他の陶磁器

報告書抄録

ふりがな	くわのきいせき							
書名	桑ノ木遺跡							
副書名	申岡警察署郡元職員宿舍新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第69集							
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下郡河4019番地							
編著者名	杉田 康之							
発行年月日	西暦2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くわのきいせき 桑ノ木遺跡	みやがきけんくしまし 宮崎県串間市 おおあざにししかたあざくわ 大字西方字桑 のき ノ木4043-1	45207		31度 27分 54秒 付近	131度 14分 07秒 付近	2001.11.26 ～ 2002. 2.13	800m ²	申岡警察署 郡元職員宿 舎新築工事 に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桑ノ木遺跡	散布地	中世	掘立柱建物跡	土師器、陶磁器				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第69集

桑ノ木遺跡

申岡警察署郡元職員宿舍新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2003年2月28日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下高河4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 田中印刷有限公司
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285
